經濟論叢

第六十三卷　第三・四號

上代社會の封建制……堀　江　保　藏

改良主義の第之化理論……大　野　英　二

英國に於ける新組合主義の成立について……前　川　嘉　一

京都大學經濟學會

第六十三卷　八八　第三、四號　二四

改良主義の窮乏化理論

大野英二

一　序言

昨今傳えられた「ヴァルガ理論をめぐる討論」に於ける諸論點の一＝ヴァルガの戰時中の窮乏化の傾向、をめぐる諸批判は、あたかも、吾が國に於ける改良主義的諸見解に對する批判をも意味しているかの如くである。討論を通じて覗い知る限り、ヴァルガは、勞働者階級の窮乏化過程と現代戰の總力戰的性格から由來する國富の減少過程とを直接對置して、交戰資本主義諸國に於ける國富の減少が、資本の運動法則を媒介として、如何に、階級諸關係へ影響を及ぼしたかに就いて、分析を怠つていると言われ得る。窮乏化の問題が、常に、マルクス資本制蓄積の一般的法則の立場に於て、資本の蓄積に照應する勞働者階級の窮乏化として、卽ち、階級分化の問題として提起せられているマルクス理論の性質を顧みれば、古典的なマルクス主義からの批判は、當然豫想され得るところである。かかる立場からの批判は、フィグルノフの見解に端的に示されている樣に、ヴァルガの如く、資本主義國全體の窮乏化の傾向として、問題の提起がなされるならば、戰時中のブルジョアジーの厖大なる富裕化は假面を被せられ、勤勞大衆の窮乏の原因は戰時中の强制勞働制度に求められないで國全體の窮乏化に歸着せしめられ、更に、戰後資

本主義の再建に際しては、勞働者階級の犠牲により再轉換を實現しようとする資本攻勢が正當化され隱蔽されることとなる。かくして、戰爭が資本主義の發展の不均等性を如何に强化し、如何に階級分化を促進したかに就いて分析の果さるべきことが要請されている。

この批判に於て明らかな樣に、戰爭による生產力の破壞は、階級諸關係の分析から切り離して考察せられ、資本主義國全體の窮乏化の傾向の强調は、正しくこの切斷を隱蔽する痲藥作用を果している樣だ。

扨て、第二次大戰後の資本主義の體制的危機＝崩壞過程に於ては、窮乏化の問題は、資本主義國全體の窮乏化の傾向として提起せられ、生產力の破壞は生產關係から獨立して考察され、その階級分化の過程の分析との關聯は遠く忘却の流れの中に託されることとなり、ここに新たなる改良主義的＝社會民主々義的設問としての性格を看取し得るのに反して、十九世紀後半期の資本主義の上昇期＝發展過程を背景とする、この窮乏化の問題に關する、改良主義的設問形態は、果して勞働者階級は窮乏化するか否か、という問題提起の中に見出される。所謂十九世紀後半期に於ける西歐資本主義諸國に於ける勞働者諸層の狀態の持續的改良の現實に直面して『窮乏化說』(Verelendungstheorie)と名付けられたマルクス資本制蓄積の一般的法則が批判の俎上にのせられたわけである。この問題は、一八九八年ベルンシュタイン・カウツキーの『修正主義論爭』の一環として取り上げられて以來、第一次大戰後のハイデルベルク綱領（一九二五年）の中にベルンシュタインの終局的勝利が認められるに至る迄、獨逸社會民主黨內部に於ける長期の理論的對立を生ぜしめたのみでなく、ノスティツッ (Nostitz)、シュテルンベルク (Sternberg)、グロースマン (Grossmann)、トロコンスキー (Tolokonski)、クチンスキー (Kuczynski)、等々の幾多の經濟學者・統計學者をして、この問題に關說せしめている。何故ならば、マルクス資本制蓄積の一般的法則は、階級分化＝拮抗の分析に關するマ

ルクス理論の支柱をなしているから。

さしあたり、研究の個人的制約により、この『窮乏化説』と稱されるマルクス資本制蓄積の一般的法則をめぐるベルンシュタイン・カウツキーの論爭を追跡することにより改良主義の理論的性格の一端を明らかにし、更に資本主義の現實の發展過程との關聯に於てその歴史的地位を規定するに止める。本稿は從來の諸研究に關する覺え書である。

註 (1) 服部英太郎「獨逸社會民主々義政策論の崩壞過程」東北帝國大學法文學部十週年記念經濟論集五七六―七頁を參照せよ。

二　改良主義の理論的性格

ベルンシュタインとカウツキーとのマルクス資本制蓄積の一般的法則に關する論爭は、第一に資本の集中・集積に就いて、第二に勞働者階級の狀態に就いて、十九世紀後半期の西歐資本主義の現實の發展過程と關聯して、展開されている。兩論點は密接な關聯を有しているのであるが、行論の關係により、第二論點に焦點を定めながら、簡單に、論爭を回顧し、その理論的性格を明らかにしよう。

一八九八年の著「社會民主黨の諸任務」に於て、マルクス資本制蓄積の一般的法則に關說して、ベルンシュタインは次の二樣の解釋が可能であるとする。第一の解釋に於ては、立法＝社會の計畫的意識的行爲、の適當な干涉は經濟的發展の傾向の支配すら阻止し時としては揚棄し得るものであり、マルクス一般的法則もまた此の樣な傾向と解すれば、曲解して現實と一致させる必要もなく、且つまた現實の發展と共に益々無意味になる。第二の解釋に於ては、マルクスの敍述と異る現實の展開も結局階級對立の根本的緩和作用たり得ず、文字通りではないにしても、

マルクスの敍述している様に破局的革命を惹起するであろう。と述べて[1]、この二様の解釋はマルクスの不滅の著作の全體を通貫する。『二元論』[2]を例證するものであり、マルクスが起草より遙か以前にたてた理論を證明するために、發展から生ずる筈の結果を豫め確定してしまつていることから由來するもの、と敍述されている。[3]扨て、一九〇一年の「補遺、勞賃問題のマルクス主義的處理の二三の缺陷」[4]に於て、ベルンシュタインは、一八九〇年以降十年間の中に勞賃問題に關する幾多の點に於て、見解が本質的に變化したことを表明し、「一般に勞賃理論の可能性を否定」し、[5]マルクスの勞働力の價値法則、更に資本制蓄積の一般的法則も亦拋棄するに至り、ここに改良主義的勞賃論の先驅的形態が見出される。ベルンシュタインによれば、現實を良心的に抽象すればする程法則は益々陳腐なものになつてしまい、常に無數の但し書を附け加へなければならず、マルクスの恐慌論・勞賃の一般的運動を規制する產業豫備軍も亦、現實に即しない『一般化』[6](Verallgemeinerung)であり、現實を把握するためには幾多の『中間肢』(Zwischenglieder)が必要とされる。かくして、第一次大戰後、ネルティング等により繰返されている理論[7]が積極的に展開されるに至る。即ち、「工業及び農業に於て勞働の生產性が昂揚され、運輸機關が幾層倍も發達し未開拓地が自由になる限り、一定の勞賃の高さを規定する經濟の自然法則は存しない。」「今や年々生產される享樂財の量は絕えず增加しようとしており、その中幾何が、社會の生產し用役を給付する諸層に屬し、幾何が、貢物としての所有に歸するかを規定する經濟的自然法則は存しない。社會の富の分配は何時の時代に於ても、權力と組織の問題であつた。權力諸關係が安定し組織が不動であればある程、分配の原理とその時の勞賃法則は〃ますます鐵の樣に〃なる。今や權力諸關係は推移し組織形態は轉化過程にある。一方の局面の新しい形勢は他方の局面の新形勢へ反應して、兩者の結果が財貨の分配を規定する要因をなすのである。」と述べて[8]、更に、その當時に於て特徵的な現

象として、富の一般的增加を指摘して、「平等な分配は經濟的進步と一致しうるであろう。」とすら主張するに至る。[9] ここに明らかな樣に、勞働力の價値法則を完全に拋棄するベルンシュタインに於ては、一方に於ける技術の改良・生產の合理化、他方に於ける勞働組合の强化・社會保險等により、勞働者階級の狀態の無限の改良が容認されることとなり、資本と賃勞働との對立は緩和され、階級鬪爭の基礎は生產諸關係から切り離された流通過程に求められることとなり、生產諸關係から獨立した生產力の增大は必須の要請となるに至る。改めて指摘する迄もなく、このベルンシュタインの勞賃論は、正しく、ブラウンタールの勞賃の生產力理論[10]とネルティング・ヒルファーディングの勞賃の權力理論[11]との『接合』[12]から成り立つ第一次大戰後の社會民主々義的＝改良主義的勞賃論註と、同一線上に在る理論構成を示しており、その先驅的理論の役割を果しているものと言うことが出來る。

註　リンデ並びにクリヴィッキーによれば、獨逸社會民主黨の勞賃論の骨子は次の如くである。一、資本家も勞働者も生產過程に參與するのであり、兩者は社會生產物を分割する。二、勞働力の價値法則は、現實の立證している樣に、少くとも近代の經濟に於ては存しない。三、勞働力の商品性格は未だに廢棄されていないとすれば、此の過程は既に始まっており、勞働者組織の意志により終末に到達せしめ得る。四、勞賃は政治的現象であり、階級鬪爭の關係並びに勞働の生產性により規定される。五、產業豫備軍は何ら資本主義の不可避の結果ではない。六、かくして資本主義社會に於ても勞働者階級の狀態の改良は無限に獲得され得る。(H. Linde, Lohntheorie und Lohnpolitik der Sozialdemokratie 1931 S. 34 und M. M. Kriwitzki, Die Lohntheorie der deutschen Sozialdemokratie. Unter dem Banner des Marxismus. 1929 S. 385)。

十九世紀後半期の西歐資本主義の現實の發展過程との背反の主張の下にマルクス資本制蓄積の一般的法則を否定し更に積極的に理論を構成するに至つたベルンシュタインの理論的性格は、以上略述の如くであるが、その立論の基礎をなす十九世紀後半期の現實に於ける勞働者階級の狀態に關しては、立論の裏付けをなすに足る實證的分析を認

めることは出來ない。かくしてベルンシュタイン批判の鍵鑰が、十九世紀後半期の資本主義の現實の發展過程に於けるマルクス資本制蓄積の一般的法則の實現の樣相を分析する點に求められたのは當然である。しかしながら、カウッキーは、この所謂『窮乏化』の問題は、「極めて第二義的な意味しか持たない問題である。」として[13]、階級關係の分析及びプロレタリア革命に關するマルクス理論の基底をなす資本制蓄積の一般的法則に關する問題を、「一定の事實の檢證よりも、窮乏(Elend)という言葉の解釋が問題なのである。」と述べ[14]、言葉の解釋に問題をそらしてしまう。卽ち、多少のニュアンスは認められるにしても「勞働者の手に入る生產物量は增加し得るが、勞働者により作られた生產物量に對する勞働者の分け前は減少する。」[15]という所謂『相對的窮乏化說』と稱せられる立場或は勞働者階級の狀態が社會の一般的向上の背後にとり殘されるという『社會的窮乏化』[16]の立場にそ、の理論的立場を認めることが出來る。この立場の批判は理論的には後に展開することとして、さしあたり、カウッキーの立場の曖昧さをその十九世紀後半期の勞働者階級の狀態の檢證との關聯に於て明らかにしておこう。カウッキーは一八九八年の著「ベルンシュタインと社會民主黨の綱領」に於て、一面に於て、先進資本主義諸國に於ける生理的窮乏の一般的な增進を否定すると同時に、他面に於て、勞働者の大衆の狀態が十九世紀前半と同樣に改良されていないことを指摘するエンゲルス及びウェッブの敍述を援用して、勞働者階級の生理的窮乏からの向上が遲々たる過程であるとすれば、社會的窮乏の不斷の增進が歸結され得ることを主張するに止まらず、窮乏增加の指標として、婦人・幼少年勞働の增加、結婚數の減少、中間層の沒落＝プロレタリアートの數の增加を指摘し、「婦人の賃勞働は、單に社會的窮乏のみならず生理的窮乏を、なんと招き易いものであろうか！」と詠嘆し、更に「資本主義の支配が新たに開拓した諸國に於ては、一層急激に顯著に且つ議論の餘地なく窮乏(生理的窮乏—大野註)が增加している。……プロレ[18]

タリアートの國際的連帶性は決して空虛な妄想ではない。」と述べている。[19] カウツキーの理論的立場と現實の分析との背反は、一九〇八年のツガン・バラノフスキー批判の論文「窮乏化と崩壞」に於て、一層明らかに示されている。卽ち、カウツキーは十九世紀後半期に於て狀態の持續的に改良せられた勞働者層は、英國の場合には「二三の層にのみ主張し得て、勞働者階級の總體に就いて主張し得ない。」歐洲の工業諸國に於ては「勞働者の貴族にのみ」認め得ると述べて、[20] 勞働者階級中の局部的現象と看做している。扨て注目すべき點は、既に一九〇二年の著「社會革命」に於て「最近數年間に、勞働者の狀態は恐慌及び物價騰貴の結果、著しく絕對的に惡化した。」と指摘されているのであるが、[21] 此の論文に於ても、勞働者階級中の貴族層すら絕對的窮乏の脅威に曝されていることを認めるに至つたことである。卽ち「此の數十年間に實質勞賃を騰貴せしめた諸要因は既に一切を擧げて後退せんとしている。」と述べ、[22] その諸要因としては、第一に食糧品の價格の下落の止んだこと、第二に勞働者保護立法も亦行き詰りに逢着したこと、第三に勞働組合の權力の增大は相對的に卽ち企業家の權力の增大に比較して限界に逢着するに至つたこと、が指摘され「英國に於ては五〇年代以來、ドイツに於ては六〇年代殊に八〇年代以來、始まつた向上する實質勞賃と廣汎な勞働者層の狀態の時折の改良の時期は終つた。新しい時期が始まり、プロレタリアートの經濟的鬪爭のための諸條件が著しく惡化して、勞働者のますます大なる範圍が沈滯或は實に過渡的ではない永續的實質勞賃低下の現象の脅威に曝されているのである。」と。[23] 上述の如く、カウツキーに於ては、十九世紀後半期に狀態の持續的に改良せられたのは、勞働者階級中の局部的現象と看做され、而もこれらの諸層も現實の展開と共に、絕對的にも窮乏化するに至つたことが認められ、更にプロレタリアートの國際的連帶性すら主張されているにも拘らず、此の論文に於ても窮乏化の理論は相對的＝社會的窮乏化の意味に於て把握さるべきことが强調されている。

この様なカウツキーの立場の曖昧さを顧みるとき、「カウツキーは勞働者階級の統一性を忘れていた。」との批判[24]も正鵠を射たものであり、かかる意味に於て、「客觀的には、カウツキーの解釋はマルクス主義と大戰前の修正主義との黄金の橋架をなしていた。」と言うことが出來る。[25] 何故ならば、マルクス資本制蓄積の一般的法則に於ては「勞働者階級すなわち「總勞働力[26]」の狀態が問題とされているから。卽ち、マルクスは資本論第一卷第七篇「資本の蓄積過程」に至り、個々の資本家と個々の勞働者との關係の分析と共に、階級としての資本家と階級としての勞働者との關係の分析に視角を擴大して、第二十三章「資本制蓄積の一般的法則」の冒頭に於て、「資本の增加が、勞働者階級の運命に及ぼす影響を取扱う。」と述べている。改めて指摘する迄もなく產業豫備軍と現役軍との統一としての勞働者階級＝總勞働力の狀態が對象とされている。扨て、カウツキーの偏向を明確にするためには、尙、マルクスの敍述に從つて資本主義の長期の發展過程に於て、資本の增大に照應して勞働者階級の狀態が相對的にも絕對的にも窮乏化するに至ることが明らかにされねばならない。この場合、分析の樞軸は實質勞賃[27]の運動であり、實質勞賃が騰貴し而も勞働者階級の狀態が絕對的に改良され得る場合のみが檢出されるわけである。勞働日の延長或は勞働の强度の增加による支出勞働の增大を補償するための諸生活手段量の增加を意味する勞賃の增加は、何等勞働者の狀態の絕對的な改良を意味し得ないことは言う迄もない。結論的に述べれば、基本的に重要な場合は次の二つの場合である。卽ち、第一は資本の構成不變の場合に蓄積に伴い勞働力の需要が增加し勞賃が騰貴する場合。第二は勞働の生產力が增大し勞働力の價格が勞働力の新しい價値以上に在る場合。まず第一の場合に就いて考察してみれば、この場合にも賃勞働者の從屬關係や搾取はなくならないことは言う迄もないが、「勞働者たちにとつて最も有利な蓄積條件[28]」であり、勞働者たちは、「享樂の範圍を擴大し、その衣類・家具等々の消費ファンドをより充分に準備し、ま

た僅かながら準備金すらつくることが出來る[29]」という『氣樂な自由』な狀態にあるにしても、この樣な場合は、「十五世紀の全體および十八世紀の前半期[30]」に認められたものであり、「資本主義制度の一般的基礎が與えられているとすれば、蓄積の經過中には必ず、社會的勞働の生產性の發展が、蓄積の最も有力な槓杆となる點が生ずる[31]」のであるから、資本の構成不變の場合は、上昇期にある資本主義の長期の發展過程を問題にする場合、マルクスの指摘している樣に、「一の特殊的段階[32]」として除外することが出來る。次に、第二の場合に就いて考察してみよう。勞働の生產力が增大し勞働力の價値が低下して、勞働力の價格と價値とが乖離する場合に、勞働力の價格は、直ちに、勞働力の新しい價値に應じて一致しないで、資本と勞働との力關係により、「諸々の中間運動が生じ得る[33]」わけである。かくして、勞働の生產力が增大する場合には、勞働力の價格は低落して新しい價値に一致する迄は、「勞働者の生活手段量の同時的で持續的な增大を伴いながら絶えず下落しうる[34]」のである。云う迄もなく、この場合にも、「相對的には、卽ち、剩餘價値と比較すれば、勞働力の價値は絶えず減少するであろうし、從つてまた勞働者と資本家との生活狀態の間の罅隙は擴大されるであろう[35]。」卽ち、「相對的勞賃[36]」は低落している。扨て、勞働の生產力の增大は勞働の强度の增加を伴うのが常であり、更に、勞働の生產力の增大は資本の技術的構成の高度化により表現せられ資本の價値構成に反映し、資本の有機的構成は高められる。これは相對的過剩人口の增大を意味する。資本の構成高度化は競爭と信用の發展と共に資本の集中を促進し、資本の集中は社會的總資本量の積極的に增加しない場合にも進行して逆に資本の構成を高度化し、兩者は相互媒介的に展開され、更に高級勞働力の低級勞働力による代置、「勞働の一定種類にたいする無關心[37]」(Die Gleichgültigkeit gegen eine bestimmte Art der Arbeit) の展開、就業勞働者部分の過度勞働は勞働者階級中の豫備軍を膨脹させ豫備軍の膨脹は逆に過度勞働を强制するという相互作

用等の諸要因により産業豫備軍はますます増大し、資本と勞働との力關係を變化せしめて、勞働力の價格を勞働力の新しい價値へ即應せしめるのみならず「勞働の生産力が高まれば高まるほど、勞働者たちが彼等の就業手段に加える壓迫がますます大となり、かくして勞働者たちの生存條件がますます覺束なくなるということ。」[38] これが第二の場合の歸結である。即ち、吾々の設問に答えるマルクスの「結語は、現役勞働者軍中の絶えず増大する層の貧困と、被救恤的窮民の死重」[39]とである。

勞働者階級は、一時的或は局部的現象として、往々、その絶對的狀態の改良され得ることがあるにしても、現役軍と産業豫備軍の統一としての勞働者階級＝總勞働力としては、社會的勞働の生産性の發展が蓄積の最も有力な槓杆となるに至る時點を經過した資本主義の長期の發展過程に於ては、その狀態は絶對的にも窮乏することが明らかにされている。これは總勞働力としてみれば價値以下に切り下げられることを意味している。即ち、勞働者階級の相對的窮乏化は不斷に進行し、絶對的窮乏化は資本と勞働との對立＝拮抗を媒介しつつ、斷續的に進行する。[40]

上述によりマルクス資本制蓄積の絶對的・一般的法則を相對的＝社會的窮乏化として把握するカウツキーの立場が、この法則の一面的歪曲に他ならないことが明らかにされた。

註 (1) Ed. Bernstein, Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Anfgaben der Sozialdemokratie 1898. S. 176～S. 177

(2) Ed. Bernstein, ibid. S. 177 ローザは次の樣に述べている。「ベルンシュタインの〝一元論〟即ち統一性は永遠化された資本主義秩序の統一性、窮局目的を放棄してその代りに一定不變のブルジョア社會に人類發展の終局をみようとする社會主義者たちの統一性である。」と。(Rosa Luxemburg, Gegen Den Reformismus. Gesammelte Werke. Band. Ⅲ 1925 S. 75)

(3) Ed. Bernstein, ibid. S. 177.

(4) Ed. Bernstein, Zur Geschichte und Theorie des Sozialismus. S. 33～S. 109 1901 "Nachtrag: Einige Mängel der marxist-

ischen Behandlung des Lohnproblems", in "Zur Frage des ehernen Lohngesetzes"

(5) Henryk Grossmann, Das Akkumulations-und Zasammenbruchsgesetz des kapitalistischen Systems. Leipzig 1929 S. 533 有澤・森谷譯七五五頁。

(6) Ed. Bernstein, ibid. S. 101.

(7) 服部英太郎「賃銀政策論の史的展開」三一頁參照セよ。

(8) Ed. Bernstein, ibid. S. 107.

(9) Ed. Bernstein, ibid. S. 108.

(10) H. Linde, Lohntheorie und Lohnpolitik der Sozialdemokratie. 1931 S. 30.

(11) M. M. Kriwitzki, Die Lohntheorie der deutschen Sozialdemokratie. Unter dem Banner des Marxismus. 1929 S. 381.

(12) H. Linde, ibid. S. 34.

(13) K. Kautsky "Bernstein und Sozialdemokratischen Programm" Stuttgart. 1899 S. 128 山川譯一九六頁。

(14) Tolokonski-Nowitzki-Jakobsohn, Das allgemeine Gesetz der kapitalistischen. Akkumulation. Unter dem Banner des Marxismus. S. 33.

(15) K. Kautsky, Die soziale Revolution, 1902 S. 24.

(16) K. Kautsky, Bernstein und Sozialdemokratischen Programm, S. 128 山川譯一九七頁。

(17) K. Kautsky, Verelendung und Zusammenbruch, in „Die Neue Zeit" 26 jg. 1908 II. S. 544～S. 545.

(18) K. Kautsky, Bernstein und Sozialdemokratischen Programm. S. 124 山川譯一九一頁。

(19) K. Kautsky, ibid. S. 126 山川譯一九五頁。

(20) K. Kautsky, Verelendung und Zusammenbruch. S. 544.

(21) K. Kautsky, Die soziale Revolution. S. 30.

(22) K. Kautsky, Verelendung u. Zusammenbruch. S. 546.

(23) K. Kautsky, ibid. S. 549.

(24) ローゼンベルク資本論註解（第一巻）五六六頁。

(25) Tolokonski-Nowitzki-Jakobsohn, ibid S. 37.

(26) K. Marx, Das Kapital I. Herausg. von Adoratskij. 1932 S. 673.

(27) マルクスは「勞働力の交換價値と、この價値がそれに轉態するところの生活手段の分量との間の區別は、いまや名目的勞賃と現實的勞賃との區別として現象する。」(K. Marx, ibid. S. 568) と規定している。名目的勞賃(nominieller Lohn) は價値の面から評價された勞賃の額 ― K. Marx, ibid. S. 568 長谷部舊譯八七六頁―と規定してゐる。）現實的勞賃 (reeller Lohn) は諸生活手段の量を意味し、使用價値の面から評價されたものである。現實的勞賃は名目的勞賃とは異った諸運動をなすことに就いて、マルクスは「勞働力の價格がそれにおいて實現される生活手段の分量は、この價格から獨立する、またはこの價格の變動とは異なる諸運動をなし得た。」(K. Marx, ibid. S. 556) と指摘している。この場合の現實的勞賃の同義語として實質的勞賃なる範疇を用いる。

(28) K. Marx, ibid. S. 647 長谷部譯（舊譯）一〇〇一頁。

(29) K. Marx. ibid. S. 649 譯一〇〇一頁。

(30) K. Marx, ibid. S. 647 譯九九三頁。

(31) K. Marx, ibid. S. 653.

(32) K. Marx, ibid. S. 653.

(33) K. Marx, ibid. S. 547. 長谷部舊譯八四三頁。

(34) K. Marx, ibid. S. 548. 長谷部舊譯八四四頁。

(35) K. Marx, ibid. S. 548.

(36) マルクス「賃勞働と資本」マルクス・レーニン主義研究所譯六七頁。

(37) K. Marx, Zur Kritik der politischen Oekonomie. Herausg. von Adratskij 1924 S. 240 宮川譯三一四頁。

(38) K. Max, Das Kapital I. S. 680 長谷部譯一〇四三頁。

(39) K. Marx, ibid. S. 679 譯一〇四二頁。

(40) Eugene Varga, Two Systems. Socialist Economy and Capitalist Economy.1939 p. 143.

三　改良主義の歴史的地位

マルクス資本制蓄積の絶對的・一般的な法則は、「他のあらゆる法則と同様に、その實現に際しては多様な諸事情により變容（モディファイ）されるのであり、かかる諸事情の分析」[1]を十九世紀後半期に於て果すことがここでの問題である。これは反面に於て改良主義の歴史的地位を明らかにすることを意味する。十九世紀後半期に於ては、あたかもイギリス資本主義を始めとして、フランス資本主義・ドイツ資本主義は帝國主義的様相を呈するに至り、飛躍的發展と構造的變動の過程にあつた。自由競爭が支配的であつた資本主義の最高の發展は、一八六〇及び七〇年代にあり、この時代の直後に、植民地略取の驚異的『飛躍』が始まり、世界の領土分割闘爭が激化して、自由競爭的資本主義＝産業資本主義から獨占資本主義＝金融資本主義へ推移しようとする構造的變動の過程が、世界の領土分割闘爭の激化と結びついているという事實が確認されている。[2]かかる十九世紀後半期に於ける資本主義の現實の發展過程の基本的特徴との關聯に於て、分析が進められねばならない。分析の對象となるべき勞働者階級＝總勞働力の範圍を決定する要素は、改めて指摘する迄もなく「資本單位であり、勞働者の國籍ではない。」[3]それ故に、商品輸出の典型的であつた自由競爭的資本主義が資本輸出の特徴的な獨占資本主義へ推移すると共に、一定帝國主義的母國の資本に雇傭される勞働者階級の範圍は擴大され、その狀態を把握するには、いわばユルゲン・クチンスキの名付ける『帝國勞賃』[4]（Empire Wages）の如き總勞働力の平均勞賃並びに其の他勞働諸條件の平均が算出されねばならないであろう。これは、さしたり國際勞賃の比較の問題をも含み、技術的にも困難を伴つている故に、特定國の勞働者階級の狀態の趨勢が分析された後に、その帝國主義的聯關により、補正の加えられるのが合理的であろう。吾々は勞働者

階級の狀態の分析に於て方法的に正鵠を射ているユ・クチンスキーの敍述に從つて、先進資本主義諸國に於ける勞働者階級の狀態に關して概略を知り、十九世紀後半期に於けるその狀態の推移の事實とその推移を生じた原因の所在を明らかにしよう。

まず、異論のない勞働者階級の相對的な窮乏化の趨勢は、第一表[5]に於て明示されている。この表に示されているのは、帝國主義國に於て、勞働者階級の狀態が社會の一般的向上の背後に如何にとり殘されて來たかという所謂『社會的窮乏化』の側面である。クチンスキーの相對的勞賃算出方式は第二表[6]の如くである。

問題の焦點である勞働者階級の絕對的狀態の推移に就いて檢討すれば、クチンスキーの研究の總括は次の如し。

イングランドに於ける勞働者階級の狀態の趨勢に關する結論。「一八二〇—一八五〇(註A)勞働者の狀態の惡化は、恐らく全く著しい。

一八五〇—一八七〇(註B)イングランドの外部で英國資本によつて雇傭された勞働者の犧牲による勞働者狀態の改良。恐らく、六〇年代の終りに於ける勞働者の狀態は絕對的な意味に於て、二十年代の當初より良好であつたであろう。

一八七〇—一九〇〇(註C)比の期間の全體を通じて、勞働者の狀態は一般に向上しなかつたが、し

第一表 1900＝100

聯合王國に於ける相對的勞賃		ドイツに於ける相對的勞賃	
1859—68	112	1860—7	170
1869—79	111	1868—78	133
1880—6	96	1879—86	101
1887—95	95	1887—94	93
1895—1903	94	1894—1902	76
1904—8	91	1903—9	65
1909—14	88	1909—14	58
1924—32	78	1924—35	44

第二表

$$\text{相對的勞賃} = \frac{\text{一勞働者當り純勞賃}}{\text{一般小賣物價}} \div \left(\frac{\text{人口一人當り}}{\text{國民生產物}} \times \frac{\text{一般小賣物價}}{\text{一般卸賣物價}}\right)$$

$$\text{相對的勞賃} = \frac{\text{一勞働者當り}}{\text{純實質勞賃}} \div \left(\frac{\text{人口一人當り}}{\text{國民生產物}} \times \frac{\text{生計費}}{\text{卸賣物價}}\right)$$

第三表

聯合王國に於ける純實質勞賃

（週期平均1900＝100）

週期	指數
1820—6	43
1827—32	42
1833—42	49
1843—9	52
1849—58	57
1859—68	63
1869—79	74
1880—6	80
1887—95	91
1895—1903	99
1904—8	95
1909—14	93
1924—32	93

※1820—50完全就業週當り總實質勞賃，1850—1932，失業算入1912—32，社會保險支拂算入，1924—32，失業保險支拂及び收入算入

かし、英國資本によつて雇傭されたイングランド外部の勞働者の增大した搾取を犧牲にして、六〇年代の終りと比較すれば、恐らくは、ほぼ同じままか或は幾分より惡かつたであろう。[7]」

註A　一八二七—三二年から一八三三—四二年までの總實質勞賃は熟練勞働組合の勞賃データにより而も成年勞働者のみにかゝわるものであり、婦人・幼少年勞働殊に幼少年勞働の割合の增加を算入し得たら、むしろ明らかに實質勞賃の減少を示し、一八三三—四二年から一八四三—四九年までの增加は失業殊に一八四七年及び四八年の失業データの算入により消滅する。四十年代に於ける狀態は勞働日も最早延長し得ず勞賃も最低にして、勞働者は貧困と忍耐の限界に達し、四十年代の終りには明らかに二十年代當初より惡化していた。[8] 絕對的剩餘價値生產の限界に到達していたことが示されている。

註B　此の期間中に搾取方法が勞働日の延長に代つて勞働の强度の增加を主とするに至り、こゝに半世紀にわたる實質勞賃の增加と勞働時間の減少の事實の意味が容易に理解される。次に四十年代以降の年はまた英國の植民地及び他の諸國への投資が急速に增大した年であり、こゝから由來する巨大な超過利潤取中の少部分がイングランド勞働者に分與された。更に、この間の實質勞賃指數の增加の幾分かは產業構造の變化、例へば農業から工業へ、纖維工業から鐵鋼工業への變化によるものである。しかしながら工場への交通狀態・工場內の衛生狀態の改良等の勞働條件の改良と相俟つて、勞働の强度の增加を考慮してもイングランド本土の勞働者狀態は幾分改良せられた。[9] トロコンスキー・ノビツキー・ヤコブゾーンは、「法則（マルクス資本制蓄積の一般的法則—大野註）の批判者及び辯護者は、勞働者の狀態の不斷に改良せられた最初の三十年間、マルクス

が尙生きており執筆していたことを忘れていた。」と指摘し、(Tolokonski-Nowitzki-Jakobsohn, Das allgemeine Gesetz des kapitalistischen Akkumulation. Unter dem Banner des Marxismus. 4jg. 1930 S. 47) 工場勞働者・工場法の適用された部門の勞働者の狀態が『極めてにぶい眼にすら映つた』程改良せられた事實を認めた最初の人がマルクスであり、而も一八四九年から一八六〇年に至る迄のイングランドのプロレタリアートの狀態が改良せられた原因について、マルクスが詳細な說明を與えていたことを資本論からの引用により示し、「此處に引用された勞賃騰貴のすべての原因は、勞働市場からの失業の消滅と結びついている。」(Tolokonski, ibid. S. 51) と述べ、次の七項目に總括する。「一、工場工業の異常に急速な成長々工場工業による農耕人口の異常な吸收々これは技術の發展によるよりはむしろ穀物條例・木綿及びその他の原料に對する輸入關稅の撤廢によつて結果した。二、戰爭の兵士に對する需要。三、オーストラリヤ及び合衆國への著しい國外移住 (Auswanderung)。四、アイルランドからの移民の流出 (Exodus)、これはアイルランドからの農業勞働者の供給を遮斷する。五、アイルランドに於ける人口減少——二三のイングランドの農業地區に於ける人口の積極的減少、六、婦人少年勞働の制限。即ち成年男子勞働者の相應する就業增加を意味する。七、勞働日の十二時間から十時間への短縮—その他の事情が同じであれば働き手の需要の增加を意味する。」(Tolokonski, ibid. S. 51) この樣な諸事情により五十年代の勞賃騰貴の說明をなし得たと主張している。トロコンスキーに於ては勞賃の騰貴は勞働者の狀態の改良と等置されている。相對的剩餘價値生產の方法に伴う、勞働時間の短縮・勞賃增加・勞働强度の增加の面に着眼すべきであり、この點クチンスキーの着想は正しい。

註C

まづ、この間の實質勞賃の增加の約三分の一は lower-paying industries から higher-paying industries への移動即ち英國經濟社會 (English capitalist society) の構造變動によるものであり、次第に比較的低く支拂われる仕事はイングランドの外で英國資本により雇傭される勞働者によつてなされ、イングランドにある工場では熟練せる比較的高く支拂われる勞働者によりなされる仕事の割合が不斷に增加し、農業と織維が相對的に重要性を失つたことに因る。更に、勞働の强度は著しく增加し、勞働時間・衞生狀態に關する改良は先期間程ではなく、住居狀態はむしろ惡化し、殊に失業者の狀態の著しい惡化、等の諸原因により勞賃騰貴が相殺された。[10] トロコンスキーは六十年代以降に於て、資本側蓄積の一般的法則の作用が部分的に中和され、後進諸國の勞働者層へ轉嫁された事情として第一に國外移住者がこの時期に厖大な數に及び、この樣な大衆の國外移住を可能ならしめた理由は大きな移住領域が存在し、そこに於ては、土地が自由に入手出來、「今日の賃勞働者は、明日の

獨立自營の農民または手工業者となる』點にあつたことを、第二に後進諸國との貿易の獨占と植民地搾取により超過利潤の成立したことを、第三に十九世紀後半期の重工業＝生産手段生産部門の嵐の如き發展が暫定的に過剰人口を吸收したことを、擧げ、各要因に詳細な資本論からの引用を以て裏付けを果している。(Tolokonski, ibid. S. 52～S. 57) 七十年代以降に就いて實證的分析が果されなければならない。更に、トロコンスキーの論文の『編輯後記』に於て重工業の發展が資本の構成不變の場合にも可能であつたと附加しているが、十九世紀の後半期は生産力の飛躍的に增大した時期故に、かゝる主張は支持し得ない。試みに勞働の生産性の昂揚に就いて檢討してみれば、第四表[11]及び第五表[12]の如くである。

第四表

ドイツ工業に於ける勞働の生産性の昂揚 年次	就業勞働者	銑鐵生産高	一人當生産高
一八六〇年	一八、三三二人	四七九千瓲	二六千瓲
一八六五年	二二、七三五人	九三三千瓲	四三千瓲
一八七〇年	一九、三三二人	一、三六六千瓲	七千瓲

第五表

紡績業に於ける勞働の生産性の昂揚 年次	紡績工場の雇傭職工數	糸生産高	職工一人當り生産高
一八四四—四六年	一六〇、〇〇〇人	五三、三〇〇ポンド	二、七四四ポンド
一八五九—六一年	一四八、〇〇〇人	九一〇、〇〇〇	三、六七一
一八八〇—八二年	一四〇、〇〇〇人	一、三二四、〇〇〇	五、五二〇

註

(1) K. Marx, Das Kapital I. S. 679 長谷部譯 一〇四二頁。

(2) ローザ＝ルクセンブルク帝國主義　長谷部譯 一一二頁。

(3) Jürgen Kuczynski, Labour Conditions in Western Europe. 1820 to 1935. 1937 p. 29.

(4) J. Kuczynski, ibid. p. 67.

(5) J. Kuczynski, ibid p. 81 and p. 99.

(6) J. Kuczynski, ibid. p. 29 and J. Kuczynski, Die Entwicklung der Lage der Arbeiterschaft in Europa und Amerika 1870

—1933. 1934. S. 59.

(7) J. Kuczynski, Labour Conditions in Western Europe. p. 63 and p. 64.

(8) J. Kuczynski, ibid. p. 56 to p. 58.

(9) J. Kuczynski, ibid. p. 60.

(10) J. Kuczynski, ibid. p. 61 to p. 62.

(11) ヴァルガ「世界經濟恐慌史」第一卷第二部永住道雄譯七五頁。

(12) J. A. Hobson, The Evolution of Modern Capitalism 1919 p. 359 松澤・住谷・坂本譯四三八頁。

以上により、吾々は十九世紀に於けるイングランド勞働者階級の狀態に就いて概略を知り得た。而も勞働者階級の狀態の改良のピークをなしている十九世紀の最後の三分の一世紀に於てすら、勞働者の大衆の狀態は依然として改良されていなかつたのであり、公認の樂天家と稱されるギッフェン (R. Giffen) すら、「勞働者階級の四分の三が一年五〇ポンドと六〇ポンドの間又はそれ以上とつているとしても、約二五%は一週二〇シリング以下しかとつていない。そして、これは實際最低生活に必要と思われる水準以下である。」と一八九三年の王室勞働委員會に於て證言している。クチンスキーは別著に於て、一〇%實質勞賃が騰貴して而も勞働者の狀態の惡化した實例を示した後に、平均より遙かに高い勞賃を得る勞働者貴族層と勞働者大衆とを區別して考察し第六表[2]に次の樣な說明を附加している。「吾々が十九世紀の最後の三分の一世紀の間の發展を全體として概觀するならば、勞働者貴族に屬する諸層の改良せられたことは可成り確實に認め得るが、勞働者の大衆の實質勞賃の騰貴

第六表

イングランドに於ける
實質勞賃(週期平均)
1895—1903=100

週期	勞働者貴族	勞働者大衆
1869/1879	80	89
1879/1886	87	86
1886/1895	92	95
1895/1903	100	100
1904/1908	93	97
1909/1914	92	96
1924/1933	91	95

はこの三分の一世紀の間に勞働者貴族の半ばにすぎず、實質勞賃に於て顧慮せられていない諸要素（勞働の强度・失業・その他の勞働諸條件―大野註）と相殺されてしまうから、勞働者の狀態の改良されなかつた。[3]」と。この場合、勞働者貴族として計算されている勞働者層は建築勞働者、金屬勞働者、（並びに大戰後の電氣勞働者）であり、勞働者の大衆としては鑛山勞働者、纖維勞働者及び農業勞働者、種々の不熟練勞働者等が擧げられている。ノスティツッの研究によれば、この間工場及び仕事場の勞働條件は、第七表[4]に示されている如く、むしろ惡化の傾向を示しており、勞働强化の一側面をも語つている。

第七表

年次	一八八五	一八八六	一八八七	一八八八	一八九五	一八九六	一八九七	一八九八
工場及び仕事場に於ける事故 致命傷の數	三七九	三一六	三六八	三八六	四五五	六〇六	六五八	七一〇
その他の事故	七、一〇〇	六、三〇〇	六、五〇〇	七、〇〇〇	一〇、〇〇〇	一四、〇〇〇	一五、〇〇〇	一六、五〇〇

更に、カール・ブース（Carl Booth）は一八九一年、ロンドンの二三の勞働者地區、主としてイーストエンドの凡そ九〇萬人の住民の狀態を研究して、ギッフェン以上に悲慘な狀態を示す結果を得た。ブースは第八表[5]の如く住民を八階級に細別している。この表に於て、貧窮者とは、標準家族每週一八乃至二〇シリングの規則的なかつかつの所得を得る人々を意味している。A並びにB階級は、相對的過剩人口の最低の沈澱＝被救恤的窮民の範疇に屬し、その數は恐慌の度ごとに膨脹し、景氣復活の度ごとに減少する。この表に明らかな如く約三五％は絕對的窮乏そのものであり、勞働者貴族層と稱し得る範疇＝F階級は僅か一三・六％を占めるにすぎない。吾々は、十九世紀半頃

第八表

階級A	時折仕事にありつく最下層、浮浪人、半犯罪人	一・二%	貧窮者 35.2%
〃 B	時折勞賃を得る。極めて貧困	一一・二%	
〃 C	不定時に勞賃を得る	八・三%	
〃 D	餘り規則的ではないが勞賃を得る	一四・五%	
〃 E	規則的に毎週勞賃を得る。貧困線以上	四二・三%	
〃 F	高級勞働者層	一三・六%	
〃 G	下級中間層	三・九%	
〃 H	上級中間層	五・〇%	

ス帝國主義の一例としてインドを瞥見すれば、十九世紀初め以來イギリス資本主義の洗禮を受け急激に經濟構造の變化を招來し「一八一三年迄は大體に於てインドは輸出國であつたのが、忽ち今や輸入國と」[6]なるに至つた。著名なインド國内木綿製造工業の滅亡に就いては次のマルクスの敍述を見よ。「イギリスの木綿機械は東インドに急性の作用をしたのであつて、その總督は一八三四―一八三五年に確言した―『この窮乏たるや商業史上に殆んど類例を見ない。木綿織工たちの骨はインド平野を白くしている』と。」[7]かかる犧牲によりイングランドの木綿工場は一八五〇年に於ては、大ブリテン王國の人口の八分の一を働かせ、全國家收入の十二分の一を供給するに至つた。[8]ところで、イギリス資本が積極的にインドの産業的活動に參加し始めた時期は、十九世紀の中葉に在り、そのインド人民搾取は農場經營＝製藍業・製茶業・コーヒー栽培及び工場工業經營＝綿業・黄麻工業・石炭業を槓杆とした。鐵道（＝最も重要な資本主義的産業部門たる石炭業と鐵工業との總括であり世界貿易とブルジョア民主々義文明との發達の總括であると共に最も明白な尺度[9]）の發達にインド資本主義化の速度の指標をとれば、一八五九年の四三二マイルから一八六以降の英國資本によるイングランド外部の勞働者階級の搾取から生み出された厖大な利潤の中の一部が分ち與えられたことに由來するイングランド勞働者諸層の狀態の持續的改良が、その犧牲の大なるに比して餘りにも微々たるものであつたことを理解する。イギリ

九年の五〇一五マイルへの[10]躍進を看取し得る。インド人民搾取を物語る事項を斷片的に列擧してみても、農民に對する頗る苛酷な重稅、[11]インド名物の鐵鎖の間に於てすら認められた小麥の輸出增大の一般的傾向、[12]更に賃勞働者の劣惡至極の勞働條件[13]等々枚擧の暇がない。

吾々は上述のイングランド勞働者階級の狀態の改良の微々たる現實並びに植民地・半植民地の勞働者階級の狀態に想到するとき、クチンスキーの次の斷定に何等疑念を挾み得ないであろう。「若し例へば帝國勞賃(Empire Wages)或は、尙更良いのだが、何處で傭はれている勞働者であろうとも、英國資本により雇傭されている全勞働者の平均勞賃を、計算出來るとしたら、〃英國の〃(English)勞働者の絕對的狀態の發展の像は非常に、異つたものであろう。十九世紀の全體を通じて、絕對的な生活水準の急速な低落と惡化とがあるだろう。」[14]と。註

註　イングランドのみの而も特定の勞働者諸層の狀態の改良によつてマルクス批判を行い、マルクス資本制蓄積の一般的法則の理論的把握に於ける誤謬を物語ると共に、十九世紀後半期の世界資本主義の帝國主義的樣相に目を蔽う狹隘な視角を示す好例として、吾々はノスティッツのマルクス批判を擧げることが出來る。ノスティッツは十九世紀後半に於ける勞働者諸層の狀態の改良を詳細に展開して、マルクス資本制蓄積の一般的法則に關說して次の樣に述べている。「現在勞働者層の中に、大きな中間層と尙より小さい上層及び下層の存することは當然のことと思われる。……。發展は豫見或は豫言せられたよりも遙かに好都合であつた。勞働者層はすべての點で、大いなる進步を遂げた。かつ、この進步は經濟的・道德的・及び精神的窮乏が最深であつたところに於て最大である。かくして、沒落者はます〳〵深く沒落し、貧窮者は必然的にます〳〵貧窮するに相違ないとするマルクスによつて鋭く提起せられた所謂大衆の窮乏化說は、支持し得ない。窮乏化說はイングランドにより卽ち窮乏化說がその狀態と發展とに依據していた國及び產業により論破されている。」と。(Hans von Nostitz, Das Aufsteigen des Arbeiterstandes in England, 1900 S. 740)

註　(1) J. Kuczynski, Labour Conditions in Western Europe, p. 65.

(2) J. Kuczynski, Die Entwicklung der Arbeiterschaft in Europa und Amerika 1870—1933. 1934 S. 17.
(3) J. Kuczynski, ibid, S. 18.
(4) H. von Nostitz, Das Aufsteigen des Arbeiterstandes in England. Ein Beitrag zur sozialen Geschichte der Gegenwart. 1900 S. 439.
(5) H. von Nostitz, ibid. S. 732.
(6) マルクス「支那印度論」マルクス・エンゲルス全集邦譯第六卷一〇一頁。
(7) K. Marx, Das Kapital I. S. 454 長谷部舊譯七〇五頁。
(8) マルクス「支那印度論」同上。
(9) レーニン「帝國主義」長谷部譯一三頁。
(10) D. R. Gadgil, the Industrial Evolution of India in recent times, 1929 P. 21 鈴木正四譯三〇頁。
(11) D. R. Gadgil, ibid. P. 3 譯五頁。
(12) D. R. Gadgil, ibid. P. 68 譯九四頁。
(13) 擧例の一。茶園に於て勞働する「苦力」はたいていの場合、かれらの將來の展望に關して欺かれており、……契約期間中は實際の農奴に異ならなかつた。もしかれらにして逃亡せんか、逮捕されて連れ戻され、また働くのを拒めば投獄されさえもしたのである。この法律的强制に加うるに、笞刑の如き栽培業者の加える多くの不法な慣行が存していた。苦力の位置はこの投機時代の間（一八五〇—一八八〇年迄—大野註）は最惡を極めていたが、しかし後年に及んではいさゝか改善されるに至つた。」(Gadgil, ibid. P. 55～P. 56 譯七七頁)擧例の二。一八八一年に最初の工場法通過、その規定は以下の如し。「十二歳以下の少年の勞働時間の取締りを規定したにすぎず、七歳以下の少年は工場に働くことを許さず、また七歳乃至十二歳の少年の勞働時間は九時間と規定された。機械を圍ふ多少の規定は設けられていたが、いかなる衞生設備の規定をも全然缺いていた。同法は一百人或はそれ以上の職工を使傭し、かつ『機械力』を使用する工場だけに、適用することを目的としたものであつて、茶、コーヒー、および藍玉の製造工場は、同法の適用範圍からは除外されていたのである。」(Ibid. P. 89 譯一二一頁) 一八九一年に新しい工場法が制定され若干の進歩を認め得たにせよ、「どんな立法が存したにせ

よ、その適用範圍においては頗る局限されていた。」(Ibid. P. 90 譯一二二頁)

炭坑業における勞働者のためには全然立法が存しなかつた。ボンベイの紡織業に於ては「勞働者は一年間に五日の全休を得たのにすぎず。そして正規の週休が與えられていた工場でさえ、勞働者は少くとも半日間、機械の手入れその他のために出勤すべきものと考えられていた。」「女子は繰綿機の一部分と認められ、かれらは工場に附屬し、そして二時間乃至三時間はかれらが二十三時間中、何の通知もせずに仕事から離れ得る最長時間である」。八日ぶつ續けに働いた後、「かれら(繰綿所)はボンベイから他の組の職工を雇わざるを得なくなる」。」等々。(Ibid. P. 92 譯一二四頁)

(14) J. Kuczynski, Labour Condition in Western Europe, P. 67.

次に簡單にドイツに於ける勞働者階級の狀態の推移に就いて概觀しよう。

第九表(1)

ドイツに於ける純實質勞賃
(週期平均1900＝100)

週　期	指　數
1830—9*	78
1840—9*	71
1844—52	72
1852—9	63
1860—7	74
1868—78	78
1879—86	84
1887—94	92
1894—1902	97
1903—9	98
1909—14	96
1924—35	77

1830—87年完全就業週賞り純實質勞賃，1887—1935年失業及び疾病，稅及び保險支拂による勞賃の減損並びに保險の利益からうける收入算入，1903—35年勞働組合費算入

* 一八三〇—九年及び一八四〇—九年は十年平均にして週期平均ではない。

イングランドの勞働者階級の狀態が一八四〇年代に最低限に到達したと同樣の意味に於て、ドイツの勞働者階級の狀態は、殊に一八四八年の革命失敗以降、五〇年代の半頃に最低限の狀態に惡化し絕對的剩餘價値生產の限界に到達した。かくて約十年遲れてイングランドに於けると同樣に搾取方法の變化＝相對的剩餘價値生產の主導が認め

られ、實質勞賃の向上・勞働時間の短縮・幼年勞働の禁止に照應して勞働の强度が著しく增加した。扨て、十九世紀前半の間極めて多數の勞働者の有していた一種の農業上の收入は七〇年代の終り迄に著しく減少し、六〇年代殊に七〇年代にドイツの都市密集化は以前より幾分急速に進行し、勞働者階級の狀態特に住居狀態に惡影響を及ぼし、他面勞働の强度は甚だしく增加した。八〇年代以降ドイツ資本主義は國外へ投資し始め、ロシヤ・トルコ・南アメリカ・バルカン諸國・オーストリーハンガリー、後にはアフリカ及び支那に於て、ドイツ資本に雇傭されている外國勞働力はドイツ資本主義へ厖大な特別利潤をもたらした。他面に於て組織勞働者からの壓迫の增加により、且つまた勞働者の狀態へ及ぼす都市密集化の惡影響はイングランドより大であつたとしても社會保險はイングランドより大規模に導入されたから、ドイツの勞働者階級の狀態は、八〇年代及び九〇年代に於て安定し、大體に於て九〇年代にはおそらく惡化しなかつたと假定してもよい。しかしながら、イングランドに於て六〇及び七〇年代に認められた樣な勞働者階級の狀態の改良はドイツに於て看取出來ない。この相異は、イギリス資本主義の非常に廣汎な外國のチープ・レーバーの雇傭と世界市場に於けるユニークな獨占的地位から由來するドイツより遙かに厖大な特別利潤から生じたものである。[2] クチンスキーはまた勞働者貴族と勞働者大衆を區別した第一〇表[3]に次の樣に附言している。十九世紀末のドイツに於ては、「勞働者貴族の狀態はこの間おそらく絕對的に改良されたが、勞働者の大衆は全く疑問の餘地なく惡化した。何故ならば、僅かばかりの實質勞賃の騰貴は實質勞賃に於て顧慮されていない勞働者の狀態を惡化する諸要素（失業・勞働の强度・その他の

第十表

ドイツに於ける實質勞賃

（週期平均1894—1902=100）

週期	勞働者貴族	勞働者大衆
1887/1894	90	98
1894/1902	100	100
1903/1909	105	104
1909/1913/4	102	103
1924/1933	82	86

勞働諸條件―大野註）を相殺するにも足りなかつたから。[41]」と。

扨て、クチンスキーはフランスの勞働者階級の狀態を考察した後に、「西歐資本主義は十九世紀の後半期に於ても勞働力の搾取を增加し續けた。若し吾々がイギリス・フランス・ドイツ資本主義により、國外に於てであろうと母國に於てであろうと、雇傭されている全勞働者の平均勞賃及び平均勞働條件の指數を計算することが出來るとしたら、母國及び國外で雇傭されている結合された全勞働者の勞働狀態は、十九世紀の後半期の間も惡化しつづけ而もおそらく十九世紀の前半期の間よりも急速に惡化したことが分るであろう。」と述べている。[42]

以上により、吾々は十九世紀後半期に於ける先進資本主義諸國の勞働者諸層の狀態の改良の現實及びその原因を明らかにし、常に十九世紀後半期の世界資本主義の現實の發展過程との關聯に於て把握されねばならないことを示し得た。帝國主義母國に於ける勞働者貴族層の形成と植民地・半植民地搾取から由來する巨額の特別利潤との聯關を明確に指摘したのは云う迄もなくレーニンであり、ここに於ても、レーニンのマルクス理論の帝國主義段階への展開(註A)を認め得る。

註A　マルクス理論の十九世紀後半期、帝國主義段階へ移行の過程への展開・具體化を誤まつた典型的な例として、吾々はシュテルンベルクの大著「帝國主義」(Fritz Sternberg, Imperialismus 1926) を擧げることが出來る。シュテルンベルクはゴールドシュタインの指摘する樣にローザ・ルクセンブルクの蓄積論とオッペンハイマーの勞賃論及び產業豫備軍を双軸とするものであり、(Julius Goldstein, Fritz Sternberg's „Imperialismus" unter dem Banner des Marxismus. 4jg. 1930 S. 219) マルクスにより方法的に捨象されている非資本主義的領域を導入することにより、正しくその所謂『帝國主義の第一局面』(die erste Phase des Imperialismus) 或は『初期帝國主義』(Frühimperialismus) (F. Sternberg, ibid. S. 46) との關聯に於て、十九世紀後半期の西歐資本主義諸國の勞働者階級の狀態の持續的改良の事實を說明し得るものと主張する。シュテルンベルクの敍述

は、相對的過剰人口に對して全能の力を與えるところに始まつている。即ち「自由な勞働者の過剰人口は資本主義組織の前提である。過剰人口は勞働者をして、必要勞働を越えて剰餘勞働を强制する。」(Sternberg, ibid. S. 50) と。しかし乍ら、剰餘價値の前提は産業豫備軍ではなくして生産手段の收奪と勞働力の商品への轉化であり、シュテルンベルクはその『初期帝國主義』に於ては、A、資本主義發生の時期に於て最も厖大に存していた農村からの勞働力の流出・手工業者の産業豫備軍への編入が殆んど終了した時期こそ帝國主義の發端期であるから、B、帝國主義的進出は常に强力な商品輸出により――多くの場合、資本輸出を伴い母國の資本設備を擴張し資本構成高度化により遊離せられた勞働力は補償せられ、多くの場合補償されてなお餘りがあるから、C、植民地は帝國主義的進出により次第に商品生産に移行するにしても、初期帝國主義に於ては、プロレタリアートは未だ母國へ反作用する程度範圍には創出されていないから、以上三原因により全能の力を有する産業豫備軍も著しく減少し、更に資本主義諸國の商品交換の强化により植民地を有しない國にも同樣の結果を招來することになると主張し、更に他面に於ては、植民地及び半植民地搾取による厖大な利潤、産業上の獨占利潤等、一般に巨額の超過利潤が成立し、此の二要因の他に一方に於ては社會政策の作用・勞働組合の强化により勞働者の地位は强化され、他方に於ては帝國主義的進出は常に植民地戰爭の危機を孕み、階級鬪爭の尖鋭化による危機の增大を緩和するために資本は超過利潤の一部を諦觀して勞働者階級の中にも資本の支持點を見出そうとする。こゝに始めて、勞働者階級の狀態が改良せられ得たものであると主張している。扨て、この樣な帝國主義的進出の資本主義に內在する必然性は、シュテルンベルクに於ては販賣の諸條件に求められている。即ち、マルクスの擴大再生産の表式の分析に於て資本構成高度化の因子を導入し、その場合蓄積に際しての第一部門の第二部門に對する優位性を認めず、兩部門の蓄積率を同等とする前提の下に第二部門に實現され得ない『消費殘』(Konsumtionsrest) の存することを指摘してローザ・ルクセンブルクの亞流たることを示し、更に帝國主義的進出に於ける蓄積と恐慌現象との關聯が無視されてはならないと述べ、恐慌の最終決定的原因は敵對的配分關係に基ずく生産と消費との必然的不均衡に求められている。生産の社會的性質と占有の私的性質との根本的矛盾が如何にして生産と消費との矛盾としてあらわれるかに就いて追求されていない。かくして、シュテルンベルクに於ては販賣とその條件は生産と生産諸關係から分離して取扱われ、改良主義の批判を企圖しながら、改良主義一般と同樣に、資本の流通過程偏重の誤謬を犯している。

以上がシュテルンベルクの基礎的な理論構成であるが、植民地・半植民地の資本主義化の進展と共に、植民地プロレタリアートが母國へ反作用し、植民地搾取を基幹とする超過利潤もまた減少し始めるが故に勞働者階級の狀態の改良も過渡的現象たらざるを得ず、再び勞働者階級は帝國主義母國に於ても絶對的にも窮乏する脅威に曝されると述べて、勞働者階級の狀態の過渡的に改良された時期を『禁獵期』(Schozeit) と稱し、かゝる現象を基礎とする『修正主義』をば『禁獵期の理論』(die Theorie der Schonzeit) と名付けるのである。シュテルンベルクは十九世紀後半期を禁獵期と銘覺している。更に、彼は帝國主義母國に於ける勞働者階級の狀態は極めて廣範圍に及び少數者を意味するが如き勞働者貴族なる呼稱は不適當と述べているが、その主張の裏付けになり得る實證力ある研究を認めることは出來ない。且つまた、これは吾々により既に批判せられているところである。

註

(1) J. Kuczynski, Labour Conditions in Western Europe. p. 96.

(2) J. Kuczynski, ibid. p. 83 to p. 91.

(3) J. Kuczynski, Die Entwicklung der Lage der Arbeiterschaft in Europa und Amerika 1870—1933. 1934 S. 25.

(4) J. Kuczynski, ibid. S. 25 勞働者の大衆としては、零細農、纖維勞働者、印刷工業に於ける婦人補助工員、建築業の職人の助手、金屬工業の職人の助手及び鍋釜匠助手金屬鑛業勞働者、すべての不熟練勞働者、纖維工業・紙製造及び加工業の熟練勞働者等が算入され、勞働者貴族に屬するものとしては、ルール鑛山の〻本來の鑛山勞働者〻ライン・ウェストファリアの大鐵工業、ベルリンの金屬工業の穿孔工・旋盤工・鑢前工及びニールンベルクの金屬工業の鑄型工、クルップ鑄鐵工場、ベルリン・ニールンベルク・ニーベルフェルトの建築工業の壁工及び建築助手、ニールンベルク・ベルリンの木工業の家具師〻ブレーメンの指物師、ベルリン・ニールンベルクの印刷工業の植字工、印刷屋、大工、一九二二—三三年に於ては、石炭鑛業・金屬工業・化學工業・釀造工業・建築業・木工業・印刷業の熟練勞働者等々が擧げられている。統計算出に際しては、當該工業の就業勞働者の數に應じて加重されている。

(5) J. Kuczynski, Labour Conditions. P. 111 to p. 112.

マルクス資本制蓄積・一般的法則の作用＝資本の蓄積に照應する勞働者階級の狀態の相對的並びに絶對的窮乏化も亦資本主義の不均等的發展の結果、常に不均等に國內的にも國際的にも不均等に實現するのであり、十九世紀後

半期の資本制生産様式の飛躍的な横への擴大は、西歐資本主義諸國に於て厖大な超過利潤を成立せしめ、一面に於て資本の集中集積のテンポを促進すると共に他面に於て勞働者貴族層を培養せしめ更に廣汎に存したブチ・ブルジョア層を社會的支柱として、國際的に改良主義的見解を成立せしめた。この資本主義の不均等的發展から由來した過渡的局部的現象に幻惑せられてマルクス資本制蓄積の一般的法則を拋棄或は歪曲するに至つた修正主義＝改良主義的諸見解はこの局部的現象を『普遍化』し過渡的現象を『絶對化』したものであつた。二十世紀に入り獨占資本主義＝金融資本主義の段階に推移すると共に、植民地・半植民地の資本主義化の進展、各國に重工業が發達し指導的工業となり、それに伴う獨占の强化は一方に資本の勞働に對する地位を强化し他方に於て獨占價格により流通過程に於ける再搾取を容易にしたこと、國際的競爭の激化、世界再分割の問題の生起等、一聯の諸事情により、まず世界市場に於ける獨占的地位を喪失したイングランドに於て、次いでドイツに於て勞働者貴族層すら絶對的窮乏化の脅威に曝されることとなり、第一次大戰前に於て最盛期をなした改良主義の支柱は搖がされるに至つた。

四　結　語

以上十九世紀後半期の資本主義の上昇期＝發展過程に於て、マルクス資本制蓄積の一般的法則の作用に變容を與えた基本的要因を明らかにし、改良主義の理論的性格並びに歴史的地位を規定した。從來のこの問題に關說する諸研究はすべてマルクス資本制蓄積の一般的法則自體の妥當性に集中されていることは既述に於ても明らかであるが、問題はむしろマルクス資本制蓄積の一般的法則の作用の不均等性をば各國資本主義社會の構造との關聯に於て把握する點に在り、ここにいわゆる『マルクス理論の發展』の契機が求められるべきであつた。これは吾々にとつても向後に殘された課題でなければならない。（一九三九・一・二〇）